

## 如是我聞～総会シンポジウムに寄せて

浜岡 政好（佛教大学名誉教授）

古い資料を片付けていたら、『南九州の協同をたずねてーコープかごしま・宮崎県民生協の印象ー』（くらしと協同の研究所）という小冊子が出てきた。1995年の4月3日から8日にかけてコープかごしまと宮崎県民生協を訪問調査した時の簡単な報告書である。私たちの研究所も当時の「みやざき詣」の流れなかにあっただのかもしれない。そして、当時も、コープみやざきへの実践家や研究者の関心の中心は、成果を上げている「聴く活動」や「購買」生協へのこだわりとそれに基づく事業活動であった。多くの他生協の職員、組合員、研究者たちが宮崎を訪ね、その成果に学ぼうと努力をしたが、多くの場合必ずしも満足いく結果をもたらさなかったように思われる。

今年の総会シンポジウムは「イノベーション」という切り口でコープみやざきの実践から学ぼうと企画されたものである。今年のシンポはコープみやざきの実践報告をメインに、ならコープとコープおきなわからそれぞれの「イノベーション」への取り組みが報告され、それらを3人の研究者がコメントを加える形で行われた。

シンポでの刺激に満ちた報告やコメントを聴き、いろいろ考えさせられた。特に、コープみやざきの実践が、自分たちの経験を、自分たちの風土性をふまえた言葉で定義していること、そして時間をかけて経験を検証し、定義を進化させていることに改めて気づかされた。

20年前の私は、コープみやざきの実践のなかで出ている言葉を捉え損なった。例えば、文字通り「聴く活動」を組合員とのコ

ミュニケーション行為として捉え、一般化して、それと同様な取り組みをすれば、みやざき以外の生協でも移転可能なものとして理解していた。

柳田国男は「マナブ」と「学ぶ」の違いに注目し、「マナブ」とは必要に迫られてオボエルこと、覚る（サトル）ことで、これは身について忘れない。しかし、「マナブ」に漢語の「学」を当てた時から、外から知識を取り込む行為に変質するというのである。自分たちの経験を時間をかけて抽象化し、概念化するのでなく、「学」んだ概念で、手っ取り早く経験を裁断し、「理解」することになり、経験から遊離する。つまり借り物の概念では、身につかないのである。

経験が伝播するには、柳田風に言えば、「学ぶ」から「マナブ」へと翻訳文化から脱却し、自分の経験を抽象化し、自前で定義できるようになることではないか。他者の経験を、「お国言葉」で定義し、自らの経験と重ね合わせるなかで、伝播が可能になるのではないか。それは自分たちの地域の文化、歴史、暮らしに密着し、その蓄積のなかで生み出された言葉で自らの経験をつかみ取ることである。

ならコープやコープおきなわの報告はもちろんコープみやざきの実践を意識しながらも、それぞれ「お国言葉」で自分たちの経験を語っていることが印象的であった。今回のシンポを通して、生協においても「マナビ」方の「イノベーション」が着実に進んでいることを実感させられた。